様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４７３０５８１

研究課題名（和文）子どもの性被害と性加害への心理・教育的アプローチ―性的発達の観点から―

研究課題名（英文）The psycho-educational approach to child's sexual assault and sexualized problem

研究代表者
野坂　祐子（Nosaka, Sachiko）

大阪大学・人間科学研究科・准教授

研究者番号：２０３７９３２４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：研究１「性被害の実態調査と被害児への支援実践」では、児童養護施設入所児童を対象としたトラウマ症状とストレス対処法の調査を実施し、性暴力のトラウマ体験を有する児童に対するTF-CBTの構成要素をふまえた心理教育プログラムの実施後の評価を行い、介入の効果を検討した。また、米国でTF-CBTの開発者らへのヒアリングと情報収集を行った。研究２「性加害児への治療教育の実践と効果評価」については、3年間にわたって公立の支援学校と高等学校の協力を得て、学校ベースドの指導案と教材等を開発した。これらの成果は、研究３「性暴力に関する心理教育ツールの開発」として、心理教育用リーフレットや報告書としてまとめられた。

研究成果の概要（英文）：In Study 1, "The survey and support practices for children who had taken sexual abuse and assault", was conducted a survey of trauma symptoms and stress coping for children after implementation of psychological education program based on the components of TF-CBT. Also, I went hearings the developers of TF-CBT in the United States. Study 2 for the "The practice and effect evaluation of treatment education to student who has sexual problematic behavior" is, with the cooperation of support school and high school over the three years, had developed some teaching plans and teaching materials of school-based. Study 3 "The development of psychological education tools for sexual violence", was put together as a psychological educational leaflets and reports.

研究分野：教育心理学

キーワード：トラウマ　性被害　性問題行動　支援

１．研究開始当初の背景

性虐待や性暴力・犯罪に関する問題は、近年、児童虐待の防止等に関する法律の改正や犯罪被害者等基本法の制定などの社会的な動きを背景に、被害児童の保護件数の増加や、メディア報道に対する関心の高まり、さらに被害者自身による申し立てや手記等の発信などによって、その実態と深刻さが顕在化しつつある。また、学校内や登下校中での子どもの性被害は、学校危機としても認識されるようになり、その効果的な予防と介入などの危機対応が求められている。

こうした社会的背景から、性暴力に対する取り組みは社会的ニーズが高いといえるが、学術的にみると、子どもの性被害の実態については大規模な調査が少なく、ケアを提供する社会的リソースも少ない現状がある。また、学校内や児童福祉施設等における子ども同士の被害－加害とその連鎖に関する問題は、重大かつ対応の困難な事例として報告されている。

性的な外傷体験は、子どもの発達に長期的な影響を及ぼす可能性が高いことから、早期発見と初期対応が重要である。被害を受けた子どもは、不安や混乱、怒り、無力感などから、不安定で強迫的な性的言動を見せたり、被害場面の再演をしたりすることがあるが、こうした性的な行動化は、子どもが再被害を受けるリスクを高めたり、他者への性加害に至ることもある。このような性暴力の被害－加害のつながりを断つためにも、早期のケアと教育的介入が必要である。

欧米を中心に、子どものトラウマに焦点をあてた心理療法や性加害を含む性問題行動に対する治療教育プログラムが開発され、実証性が確認されている。それらの内容について、日本での適用を検討することが求められている。

被害および加害側の双方の子どもへの支援では、子どものみならず保護者や教職員等への心理教育も不可欠である。よりよいペアレンティングと適切な環境調整は、子どもの回復を促し、問題行動を抑制するうえで重要な要因である。よって、本研究では、被害児童と加害児童の双方へアプローチすると同時に、それらの実践をふまえ、諸外国での取組みや資料を基に保護者や教職員のための支援用マテリアルの開発を行うこととした。

２．研究の目的

本研究では、児童・青年期の子どもの性暴力被害と性問題行動への有効な介入について検討することが目的であり、以下の３つのテーマの研究を行った。

【研究 1】性被害の実態調査と被害児への支援実践
【研究 2】性加害児への治療教育の実践と効果評価
【研究 3】性暴力に関する心理教育ツールの開発

３．研究の方法

3 つのテーマの研究において用いた調査手法は、以下のとおりであった。

【研究 1】平成 24 年度から 26 年度の 3 年間において 3 回にわたり、児童自立支援施設の入所児童（主に中学生女子：のべ 74 名）を対象とした被害状況に関する調査を行い、5 回の心理教育プログラムの評価を実施した。また、虐待や性暴力によるトラウマへの治療として実証性の高い TF-CBT（トラウマフォーカスト認知行動療法）の開発者らからの指導・研修を受け、現地（米国）で収集した資料の翻訳等を行った。

【研究 2】公立の高等支援学校と高等学校の 2 校と連携し、性加害を含む性問題行動のある生徒に対する治療教育の指導案を検討した。海外（英国、G-map）での治療モデルの視察・研修を受け、現地で収集した資料を翻訳し、教職員を対象とした研修で活用した。生徒への治療教育及び教職員研修の実施にあたっては、研究協力校において性に関する検討委員会等の校内体制を構築し、定期的な勉強会と校内研修を行い、学校での支援内容の検討を行った。協力校とともに開発した指導・支援用の教材は、報告書及び学校ホームページにて公開した。

【研究 3】児童・青年期の性的虐待や性暴力に関する支援や対応を行っている実践家（児童相談所職員、相談機関の臨床心理士、性暴力に関する研究者等）とのネットワーキング（「子どもの性の健康研究会」）を構築し、各現場のニーズ把握と実践の共有を図り、海外資料の翻訳等を行いながら、支援現場で活用できる心理教育ツールを作成した。また、それらの作成物を公開し、ダウンロードできるホームページを運営した。

４．研究成果

【研究 1】児童自立支援施設の入所児童を対象とした被害状況調査および心理教育的介入の実践を行った。3 年間にわたり毎年調査を行ったところ、女子児童のトラウマ症状は IES-R（出来事インパクト尺度）の平均値において、PTSD ハイリスク群（≧25 点）に相当し、すべての回の調査において強いトラウマ症状を有することが確認された（平成 26 年度調査における平均値は 38.1 点であった）。

こうしたトラウマ体験のある子どもへの効果が実証されているプログラムとして、TF-CBT（Trauma-Focused Cognitive Behavior Therapy；Cohen et al.2006）がある。日本での適用についても、個別の心理療法の実践と有効性が確認され（亀岡・野坂ら、2013）、本調査では TF-CBT の主要構成要素を反映させた 5 回のグループワークを開発・実施した。5 回のグループワークの内容は下記の通りであった。

表1．被害児童を対象としたプログラム構成

1	導入、コミュニケーションのタイプ
2	感情の学習と表出、リラクセーション
3	思考―感情―行動のつながり
4	非機能的な思考、認知的コーピング
5	アサーション、アファメーション

短期的な介入であり、TF-CBT の核となる構成要素であるナラティブづくりを含まないものであるため、プログラムの目標はトラウマ症状の軽減ではなく自覚化にある。施設内での生活スキルを向上させ、感情･認知･行動の各側面におけるコーピング力を高めることが目指された。結果、ストレスコーピング尺度（三浦ら、1996）の「サポート希求」と「積極的対処」が向上し（10%有意水準）、他児との意見や感情の共有体験に対する肯定的な評価が得られた。

【研究 2】性加害児への治療教育の実践と介入効果の評価を実施した。平成 21 年度～23 年度の科研調査からの継続研究であり、口頭支援学校と高等学校の協力を得て、性問題行動を有する生徒への支援･指導のための校内体制づくりを行い、定期的な事例検討会と教職員研修等を実施した。平成 24 年度は、感情の発達に焦点をあてた教育のあり方を検討し、集団保健指導において 15 の指導案を作成した。平成 25 年度は、「課題となる性行動のある生徒への指導・支援のための教材」の手引きと学習シートを開発し、5 領域（①自己理解・生活管理をすすめる学習、②気持ちの学習、③認知についての学習、④境界線・タッチについての学習、⑤性に関する基礎知識についての学習）において各目標と方法、実践例を提示した。最終年度である平成 26 年度は、問題別の 5 領域（①こころ編、②からだ編、③境界線編、④スマホ･性情報編、⑤デート DV 編）の計 42 枚の学習シートを開発した。

また、生徒への包括的な支援や指導に対する教職員の準備性を高めることを目的に、被害者支援を専門とする NPO 団体と中退予防・中退後の支援を行う NPO 団体、また支援学校卒業後に地域で性教育を行う民間団体の職員らを講師に招き、情報交換及び共有を図った。さらに、英国での専門治療施設の視察及び資料収集を行い、翻訳した資料等を学校において活用した。

同研究における海外視察および情報収集では、イギリス・マンチェスターにある「G-Map（Greater-Manchester Adolescent Project)」を訪問し、性問題行動のある思春期の子どもへの専門的介入のあり方等について調査した。調査概要は下記の通りである。

G-Map は、1988 年から活動開始し、マンチェスター市を中心に活動してきたが現在は広域を対象にしている。心理学、看護学、保護観察、少年司法、ソーシャルワーク、児童心理など、非常に学際的なスタッフからなり、セラピー／ソーシャルワークを行うのは 7 名、事務スタッフ等 4 名の計 11 名である。行政（児童相談所のような機関が主、まれに裁判所）からの紹介された性問題行動のある少年（7～18 歳）に対して、包括的アセスメントとプログラム（個別、グループ、家族、コンサルテーション等）の実施を行う。障がいのある少年には、介入期間が長くなるため 18 歳以上も対応している。スペクトラム･アプローチ（低レベルから高レベルのニーズに対応）をとっているが、予算の関係で、ほとんどが高レベルのニーズのある少年が紹介されてくる。複雑な背景や問題をもつ少年が多い。4 ヶ月間でアセスメント（プログラムの実施と併行）を実施し、レポートを作成。プログラム期間は、約 6 ヵ月半（16 週～26 週）で、平均は 18 ヶ月である。介入にかかる費用は、全額、少年を管轄する行政が負担。ひとりにつき､週に約 10 万円とのことだった。

この 6 年間で 100 名以上の高リスク少年の治療を行い、再犯率は 7.5%である。G-map の介入アプローチでは､Good Lives Model（グッドライフモデル、以下 GLM）を採用。GLM は 2002 年にトニー･ワード氏によって紹介された「犯罪からの離脱モデル」であり、ポジティブ心理学を背景とした犯罪行為から抜け出すための前向きな動機づけを高めるアプローチである。GLM では、人はだれでも基本的ニーズをもっており、真に求めるニーズを適切な方法で満たすことでグッドライフを選択できると考えている。従来の「再犯防止モデル（Relapse Prevention; RP)」は、回避･禁止を中心とする方法であったのに対し、GLM はよりよい方法に接近することを促す。GLM は、治療教育の骨子である「RNR（Risk-Need- Responsivity, リスクーニーズー反応性モデル)」との両輪で活用することで効果をもたらす。GLM では、個人のストレングス（強み）を重視している。青少年のための GLM は、成人向けの GLM における 11 のニーズをわかりやすく、次の 8 つのニーズにまとめなおしたものである。

＜G-map の 8 つの基本的ニーズ＞

①情緒的健康、②身体的健康、③性的健康、④楽しみ、⑤達成、⑥自分という人間であること、⑦目的をもち、よりよくなる、⑧人生で人とつながる

調査から、GLM は現在、性加害行動のある少年だけではなく被害者への適用も検討されており、日本においても被害-加害双方への支援的枠組みとしての有用性があるのではないかと考えられた。今後の実践及び介入研究で、その検証を行うことが課題である。

【研究 3】上記研究 1 と 2 における取組みの成果は､『平成 24 年～26 年度　非行の再発防止に向けて～行動変容のための心理教育グループプログラム報告書』、きょうだい間性暴力が起きた家庭の保護者に対する心理教育用リーフレット『どうしたらいいの？ ～

きょうだい間の性暴力を知ったとき～』(「子どもの性の健康研究会」ホームページサイトにて公開)、『平成 24 年～26 年度　思春期におけるさまざまな課題のある生徒への健康教育と生徒指導報告書Ⅰ～Ⅲ』としてまとめ、具体的なプログラム内容や教材等を掲載し、児童福祉および教育現場に還元した。

【総括】性暴力の被害-加害双方に着目したことで、被害後のケアが不十分なことによる非行や性加害などの行動化という「被害から加害への連鎖」の問題を取り上げ、性被害と性加害のそれぞれの治療教育のあり方を検討できた。被害児童を対象とする TF-CBT の構成要素は、現在、加害児童向けの治療教育ガイドラインである「Pathways」等にも導入されており、一方、性犯罪や性問題行動のある青年のために開発された「グッドライフ・モデル」は、今後、被害者支援にも応用されることが英国の支援組織（G-map）での聞き取り調査から明らかとなった。つまり、被害-加害双方への治療教育の内容は、統合されつつあり、今後、問題行動の背景にあるトラウマに着目したトラウマフォーカストな支援が求められることが示唆された（研究１及び２より)。

本研究ではまた、被害-加害双方への支援実践により、家庭内でのきょうだい間性暴力に対する支援ニーズが高いことが示されたことから（研究１及び２より)、きょうだい間性暴力が起きた家庭の保護者に対する心理教育用リーフレット『どうしたらいいの？～きょうだい間の性暴力を知ったとき～』を開発し、ホームページで公開した（研究 3)。本リーフレットには、家庭内で性暴力が起きたことを知った保護者の心情と問題への関与の促し、被害を受けた子どもへのケアの基本、加害をした子どもへの対応と家庭内のガイドラインの説明、保護者のセルフケアの項目が盛り込まれている。

さらに、性加害を含む性問題行動のある生徒への学校での支援体制と指導・支援のための教材開発について、平成 24 年度から平成 26 年度までの毎年度『思春期におけるさまざまな課題のある生徒への健康教育と生徒指導報告書Ⅰ～Ⅲ』を作成し、具体的な教材等を掲載した。

【今後の課題】いずれの実践も試行的な要素が大きく、今後さらに継続し、長期的な効果をみていく必要がある。また、性暴力の被害―加害いずれにおいてもアセスメントが不可欠であるが、専門的な臨床現場と異なり、学校現場においては一般教職員が実施可能な利便性の高いアセスメントツールの開発が求められる。本研究で採用した「グッドライフ・モデル」は国際的にみても新しいアプローチであり、それによる効果評価の方法の検討も必要である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 7 件）

①野坂祐子、子どもの性的発達と性問題行動―被害－加害の連続性とグッドライフ・アプローチ―、査読有、子ども学、Vo.3、2015、pp.55-72

②野坂祐子、非行少年への支援、そだちの科学、No.23、2014、pp.71-75

③野坂祐子、心理相談におけるアセスメント、査読有、トラウマティック・ストレス、Vol.10、2013、pp.138-146

④Nosaka Sachiko、Stress Management and Psychoeducation Practice for Female Delinquent:Based on the group work at children's self-reliance support facilities、学校危機とンメンタルケア、Vol.5、2013、pp.28-38

⑤野坂祐子、性被害・ネット被害の予防とケア、金子書房、児童心理、Vol.67、No.4、2013 年、pp.107-111

⑥大岡由佳・野坂祐子・中島聡美・岩切昌宏、性犯罪被害児・者の実態とその課題―民間被害者支援団体の調査結果を踏まえて―、学校危機とメンタルケア、vol.7、2015、pp.55-68

⑦亀岡智美・齋藤梓・野坂祐子・岩切昌宏・瀧野揚三・田中究・元村直靖・飛鳥井望、トラウマフォーカスト認知行動療法（TF-CBT）―わが国での実施可能性についての検討―、児童青年精神医学とその近接領域、Vol.54、No.1、2013、pp.68-80

〔学会発表〕（計 7 件）

①野坂祐子、性問題行動のある子どもの治療教育における感情への働きかけ、日本発達心理学会第 26 回大会、2015 年 3 月 20 日、東京大学（東京都・文京区）

②野坂祐子、児童自立支援施設における女子の背景と心理教育プログラムの意義と課題、第 20 回 ISPCAN 世界大会・第 20 回 JaSPCAN 学術集会子ども虐待防止世界会議、2014 年 9 月 14 日、名古屋国際会議場（愛知県・名古屋市）

③野坂祐子、被虐待児の情動発達と心理教育的支援、日本教育心理学会第 55 回総会、2013 年 8 月 19 日、法政大学（東京都・千代田区）

④亀岡智美・齋藤梓・野坂祐子・岩切昌宏・瀧野揚三・田中究・元村直靖・飛鳥井望、子どもの Trauma-Focused CBT のパイロット研究報告、第 11 回日本トラウマティック・ストレス学会、2012 年 6 月 10 日、クローバーぷらざ（福岡県・春日市）

⑤野坂祐子・浅野恭子・井ノ崎敦子、性暴力被害を受けた子ども向け心理教育教材の開発（1）－My Step の構成と作成－、日本安全教育学会第 13 回大阪大会、2012 年 11 月 2 日、学校危機メンタルサポートセンター（大阪府・池田市）

⑥井ノ崎敦子・野坂祐子・浅野恭子、性暴力被害を受けた子ども向け心理教育教材の開発（2）－支援者研修の効果について－、日本安全教育学会第 13 回大阪大会、2012 年 11 月 2 日、学校危機メンタルサポートセンター（大阪府・池田市）

⑦元田綾子・菊池美奈子・鈴木秀子・池川典子・野坂祐子・豊沢純子、学校における生徒の緊急時への対応と課題に関する考察－養護教諭を対象とした質問紙調査から－、日本安全教育学会第 13 回大阪大会、2012 年 11 月 3 日、学校危機メンタルサポートセンター（大阪府・池田市）

〔図書〕（計 4 件）

①野坂祐子 他、診断と治療社、子どものPTSD-診断と治療、2014、pp.61-67

②野坂祐子 他、誠信書房、誠信心理学辞典新版、2014、pp.740-742

③野坂祐子 他編著、誠信書房、子どもへの性暴力：その理解と支援、2013

④野坂祐子 他、新曜社、発達科学ハンドブック第 6 巻：発達と支援、2012、pp.276-286

〔その他〕

①翻訳：野坂祐子 他、グッドライフ・モデル：性犯罪からの立ち直りとより良い人生のためのワークブック（パメラ・M・イエイツ、デビッド・S・プレスコット著）、誠信書房、2013、pp.68-95

②翻訳：野坂祐子 他、PTSD 治療ガイドライン 第 2 版（エドナ・B・フォア他著）、金剛出版、2013、pp.237-248、pp.419-421

③監修：野坂祐子、神戸市総合児童センター、ママ・パパが教える大切なあなたの心とからだレッスン（社会福祉法人 神戸市社会福祉協議会他編）、2014

④ホームページ「子どもの性の健康研究会」http://csh-lab.com/

６．研究組織

(1)研究代表者

野坂 祐子（NOSAKA, Sachiko）
大阪大学・大学院人間科学研究科・准教授
研究者番号：２０３７９３２４